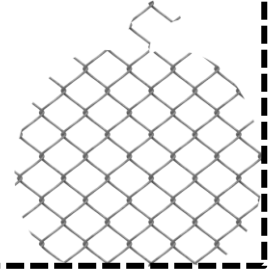


# 解放の心理学へ

## — 社会的無意識 — (3)

藤 信子



東京電力福島第一原発の処理水が、昨日（8月24日）に放出が始まった。新聞記事によると（朝日新聞 2023年8月23日朝刊）、「廃炉に伴い発生した汚染水を多核種除去装置（ALPS）で処理し、ほとんどの放射性物質を基準値未満にしたもの」で、「東電はアルプスでは取り除けないトリチウムの濃度を国の基準の40分の1（1リットル当たり1500ベクレル）未満まで海水で薄め、年間22兆ベクレルを上限に海洋放出する計画」だということ。これに対して放出に反対している全国漁業組合連合会は、処理水を海

洋放出しても科学的に安全だということも理解しているが、問題なのは、原発事故後に起きた風評被害だということであるという。福島産の果物、コメ、牛肉などは他の県産との価格差があるということだ。申し訳ないけれど、まだそういうことが起きているとは知らなかった。2016年から2019年まで、秋に福島に支援者支援のグループを開催するために出かけていた、いつも福島産の果物を買って家に送っていたが、あれも安かったのだろうか。

今回の処理水の海洋放出による風評被害とは、まず水産物が売れなくなる、また安

くなることだろうか。しかし、福島の産物は事故後、放射能を測定して、大丈夫なものを買ってきたのと思うが、人の考えはさまざまなのだろうか。ある酒造会社の人、研修会に東電幹部を招いたり、原発構内の見学をしたという、そして「初めは、処理水を岸壁からドバドバ流すものだ」と誤解していた」（朝日新聞 8月 25日朝刊）、という。これは私から見るとかなり極端なような考えだけれど、人はいろいろなイメージを持つのだなと思ってしまった。

風評を広めないためには、科学的な知識を得ることかもしれないが、放射能、放射線というのが、私自身の日常生活の中で、理解できているかというとなかなか難しい。大体「トリチウムの濃度を国の基準の 40 分の 1」と言われても、いったいそれが私にどのような影響を与えるのか分からない。国の基準はどうして、その数字になっているのか、説明してもらえると、少しは理解が進むかもしれないけれど、少なくとも新聞記事には載っていない。放射能の測定単位が、原発事故後初めて聞くようなもので、どういう意味を持つかわからない。日常生活の中で考えられるような例を出して教えてもらえないだろうかと思う。海洋放出というけれど、海に流した処理水は、潮の流れでどのように大洋に流れていくのだろうか、誰か説明してくれたらとも思う。東電はそのようなことを専門家に聞いて

ているのだろうかと思うけれど、東電も政府もそんなことを一言も言わないのは、何かまずいことがあるのだろうか。もともとの問題は、多くの人が政府や東電を信じていないことなのだと思う。

政府や電力会社の原子力発電所に対する見解を信じきれないのは、3.11の災害が起きてから、ということではないだろう。Nishimura((2016)は『核エネルギーの平和利用』という名目のもとの、経済的な発展を進めることは、戦争と原子爆弾のトラウマを都合よく隠した。その線に沿って、いつか日本全体が、原子力発電所の脅威を否定するかのように見え、この恐怖を社会的無意識へと押しやった」と指摘している。この考えに沿って考えると、3.11の原発事故の後、福島をめぐる話の中で、極端だと思えるような話も、無意識に押しやっていたものが噴出したと言えるのかもしれない。支援から帰ったところ、家で親から福島に着ていった服は家の外に捨ててくるようにと言われた、という話を聞いて、びっくりしたけれど、抑圧していたものが現れたと考えられる。風評のあまりに極端な話を聞くと、これは放射能が想起させる、原爆や戦争の恐怖を伴っているのではないかと考えてしまう。そこが意識できていないだけに、恐怖、不安は大きくなるのではないだろうか。

大体「核エネルギーの平和利用」という

言葉も考えてみると結構すごいと思う。もともと平和な利用はしていなかったけれど、これからは平和な利用をします、ということだと思うけれど、核エネルギーは、怖いものなんです、と言っているようなものですね。

無意識に押しやっているものなら、少し時間をかけて、意識できるようにすることが、恐怖、不安、そしてそれが風評について考えることとつながっていくことだと思う。その中で、福島産のものを自分はどう考えるか判断していくことが、消費者になる場合、大事なことだと思う。しかし3.11の災害後、福島の人々の間の分断は大きかったと聞く。災害支援者支援のグループも、福島で開催しても参加者は、福島に住んでいても他の県から復興のために来た人だったり、県内でも避難場所となっている土地の人の参加しかなかっ

た。人と話し合うことが避けられているような印象を持った。話し合うということは、難しいという印象を持った。でも2019年に、そのグループで福島に続けて来て、誰か福島の人が参加するのを待とうと思った。しかしCOVID-19のために移動や集まることができなくなった。また福島に行くこと、風評のことを話すことは大事なことのような気がする。

Nishimura, K.(2016) Contemporary manifestations of the social unconscious in Japan; post trauma massification and difficulties in identity formation after the Second World War. Hopper,E. and Weinburg,H..(eds.) The social unconscious in persons, groups, and societies.,volume2. Mainly Foundation Matrices, Karnac.